

Vergilius, *Aeneis* VI. 601-622.

（冥界譚とテキスト批判）

秋 山 学

I

現行の標準的テキストでは⁽²⁾、これに続いて次のような一節が語られる。

quos super atra silex iam iam lapsura cadentique
 imminet adsimilis ; lucent genitalibus altis
 aurea fulcra toris, epulaeque ante ora paratae
 regifico luxu ; Furiarum maxima iuxta
 accubat et manibus prohibet contingere mensas,
 exurgitique facem attollens atque intonat ore.

「彼らの上には、黒い岩塊がいま正に滑り落ちそうに、否落ちつつあるようにも見えて差しかかっている。金の台座が饗宴の高き食卓に輝き、目の前には王にも相応しく豪華な祝宴が整えられている。だが復讐女神のうち最も年長の者が傍にいて身をかがめ、

ウェルギリウス『アエネイス』の第六巻で主人公アエネアスは、女預言者シビュッラに導かれて冥界を探訪する⁽¹⁾。罪業への罰に喘ぐ極悪人たちが棲むタルタロスの様を、女預言者はアエネアスに語って聞かせる(VI.562ff.)冥界譚は、『オデュッセイア』以来ダンテの『神曲』に至るまで神話表象の宝庫となってきたが、この『アエネイス』のテキストには、神話学・文脈上、ややつながりの悪い箇所が見受けられる。

quid memorem Lapithas, Ixiona Pirithoumque?

「ラピタイ族の者ども、イクシオンやペイリトオスについて何を語ろうか？」 (VI.601)

彼が両手で食卓に触れようとするのを制し、身を起
こして松明をかざして雷電のごとき威嚇を放つ」

(VI.602-7)

ここで疑問となるのは、落下寸前の岩塊が威嚇する神話上の人物と言え、普通はタンタロスを指し、それはイクシオンやペイリトオスが受ける罰ではないという点である。つまり六〇一行から六〇二行以下への接続に疑義が生ずる。通例、「冥界」(タルタロス)の住人として慣例的に挙げられるのは、

① ティテュオスへ磔にされた上に禿鷹に肝臓を啄まれる

② タンタロスへ巨石が頭上に差しかかる恐怖 もしくは水面／樹枝が退く飢餓

③ シシュフォス ④ イクシオン ⑤ ダナイデス

である(3)。そこで古来、古典学者たちは上記の一節を移動させたり、あるいは六〇一行の次に欠損箇所(Lacuna)を設け、タンタロスに関する言及を想定したりする試みを行ってきた(4)。

II

ところで六〇一行で語られるペイリトオスは、必ずテセウスと一对で引かれる。たとえば同じ『アエネイス』第六巻でも、すでに二人に関してステュクスの河の渡し守カロンが次のように語っている。

nec vero Alciden me sum laetatus euntem
accepisse lacu, nec Thesea Pirithoumque,
dis quamquam geniti atque invicti viribus essent.
Tartareum ille manu custodem in vincla petivit
ipsius a solio regis traxitque trementem ;
hi dominam Diis thalamo deducere adorti;

「冥界を行くヘラクレスに対し、私は河を渡してやったが、それは楽しいことではなかった。テセウスとペイリトオスの時も。彼らは神々の裔で、力の点では誰にも負けることはなかったとは言え。ヘラクレスはタルタロスの番犬ケルベロスを手ずから縛り上げようとし、暴れる犬を王自らの座より引き出した。一方テセウスとペイリトオスはプルートーの閨から女王を奪い取ろうと試みたのだ」(VI.392-397)

ペイリトオスはイクシオンの子でラピタイ族の王、ヒッポダメアの子である。ヒッポダメアが亡くなった後、親友のテセウスと連れ立って冥界に赴き、ハデスの妃ペルセポネを略奪しようと試みる。だがハデスが彼らを歓待すると見せ、欺いて捕らえたために彼らは冥界に封じ込められてしまう。後にヘラクレスがケルペロス犬を奪取しに冥界にやって来たとき、テセウスは彼の手で救い出されたが、次にペイリトオスを助け出そうとすると大地が震撼したため、これを神意の顕れとして救出を断念した、とするのが標準的なギリシア神話の伝承である⁽⁶⁾。それに対し、ヘラクレスが両者を無事に救い出したという伝承もあり、ヒュギヌスなどはこれに従っている⁽⁷⁾。一方ヘラクレスは両者ともに救出できなかったという伝えもあり、ディオドロス・シクルスにはこの伝承が認められる⁽⁸⁾。ただしディオドロスは別の箇所ではヘラクレスが両者を共に救い出したとしており、それに基づく前述箇所のテキスト修正の試みもある⁽⁸⁾。

テセウスは『アエネイス』第六巻では、先の三九三行に続いて現行テキストでは六一八行にも現れる。

saxum ingens voluunt alii, radiisque rotarum
districti pendent : sedet aeternumque sedebit

infelix Theseus :

「他に巨大な岩を転がし上げている者、車輪の輻の上に張りつけられぶら下がる者もある。不幸なテセウスが座っており、彼は永遠に座っているだろう」

(VI.616-618)

テセウスが「永遠に座っているだろう」とされていることから、ウエルギリウスはおそらく、先のヘラクレスによる救出行に関して、テセウスをも含めてそれが失敗に終わったという伝承に従っているのだと思われる。

III

上記の点は、ウエルギリウスに続くラテン詩人たちに關して一様に認められる。たとえばオウィディウスは、『悲しみの歌』をはじめとする流刑後の作で⁽⁹⁾、オレステスとピュラデス、ニソスとエウリュアロス、あるいはアキレウスとパトロクロスの例とともに、固い友情の範例としてペイリトオスとテセウスのたとえを頻繁に引く。その際に力点が置かれるのは、特にテセウスがペイリトオスに従って冥界に下ったという伝承であり、この伝承に則ってオウィディウスは友人に対して固い友情を訴える。たとえば『悲しみの歌』第一巻第五歌「忠実な友に」では次のように歌

われる。

Thesea Pirthous non tam sensisset amicum,
si non infernas vivus adisset aquas.

「ペイリトオスはテセウスをこれほどまでに友とは
見なさなかつただろう、もし生きたまま冥府の河に
至ることがなかつたならば」

(Ovidius, *Tristitia* I. 5. 19-20)

この他『黒海からの手紙』第二巻第三歌「コッタ・マク
シムスに」(四三行)、同じく第二巻第六歌「グラエキヌ
スに」(二六行)など、流刑を被ったオウイディウスが自
らをペイリトオスになぞらえる例が数多く認められる。

またオウイディウスの作品中、ペイリトオスは『変身物
語』の中にも散見され⁹⁰、「イクシオンの子」という表現
で現れる場合もあるが(VII.210, 338; VIII.567, 613)‘それ
らは主に「カリュドンの猪狩」および「ケンタウロイとラ
ピタイ族の争い」の箇所に見られる(VII.218ff., 330ff.; VIII.
303, 404)。そしてペイリトオスの形容辞としては「ケン
タウロイ」の一節では「武勇の誉れの高さ」が強調される
のに対し、VIII.612/3では‘utque deorum spretor erat
mentisque ferrox, Ixione natus’「神々を蔑むに」‘心は

尊猛なる者」‘それにVII.210では‘audaci Ixione natus’「傲
慢な」など、悪しき評価の形容辞も見られる。これが流刑
後の詩では、オウイディウス自身がペイリトオスになぞら
えられることもあつて、テセウス／ペイリトオスの深い友
情関係にのみ着眼される点が興味深い。そして同じ『変身
物語』で「冥界」に言及される箇所は三箇所あるが(IV.
457ff.; X.40ff.; VIII.26)‘シシュフォスの名はこれらのす
べてに現れる(IV.460; X.44; VIII.26)のに対し’ペイリト
オスの父イクシオンの姿は描かれるが(IV.461; V.42)‘ペ
イリトオスの姿が現れることはない。

いずれにせよ、オウイディウスはヘラクレスによるテセ
ウス救出伝承を語ることはなく、ましてやペイリトオスの
救出が語られることはない。おそらくオウイディウスが拠
った伝承は、ウエルギリウスのもと同様であつたと思わ
れる。オウイディウスにとつて、テセウスはペイリトオス
と共に冥界に従つた親友としての意味しか持たなかつた。
したがつて、流刑地から助け出して欲しいという彼の願望
が、ヘラクレスによる冥界からの救出という神話伝承にな
ぞらえられることはなかつたのである。

またホラティウス『歌章』第四巻には次のような箇所が
ある⁹¹。

infernus neque enim tenebris Diana pudicum
 liberat Hippolytum,
 nec Lethaea valet Theseus abrumpere caro
 vincula Pirithoo.

「なぜならアルテミスは冥界の闇から貞節なヒッポ
 リュトスを解放することはできなかったし、テセウ
 スも親しきペイリトオスをレテの鎖より解き放つこ
 とは不可能だったのだから」 (C. 4. 7. 25-28)

ここではヘラクレスの名は見当たらないが、結局ペイリ
 トオスが冥界より脱出することができないという点ではウ
 エルギリウス、オウイディウスと同様である。

IV

さて先の『アエネイス』六一八行の後半以降は次のよう
 になっている。

Phlegyasque miserimus omnis
 admonet et magna testatur voce per umbras :
 “discite iustitiam moniti et non temnere divos.”
 「いとも憐れなフレギュアスも、すべての者に対し
 て警告を放ち、森に響きわたる大声でこう証言する。

〈戒めを受け、正義を学べ。神々を軽んずなかれ〉
 と」 (VI.618-620)

さらに六一一行以降はこう続けられる。

vendidit hic auro patriam dominumque potentem
 imposuit ; fixit leges pretio atque refixit ;

hic thalamum invasit natæ vetitosque hymenaeos :

ある者は金で祖国を売り、力を持つ主人を欺いた。

賄賂で法を定めあるいは改変した。またある者は

娘の閨に押し入り、禁じられた婚姻関係を結んだ」

(VI.621-623)

この一節には ‘hic…hic…’ とあるが、これは六一〇
 行以前の何かを特定の指示しているわけではない。ここ
 から、六二〇行以前の二節を動かして、冒頭で掲げた矛盾
 を解消する試みが行われうる。その際に問題となるのは、
 六一八行に現れるフレギュアス像についてである。

・フレギュアスは、通常はデルフォイのアポロン神殿を襲
 うという不敬を働いたとされるほか、イクシオンの父親と
 同一視されることがある。イクシオンは、『アエネイス』
 第六巻でも六〇一行に現れていた。ここから、現行テキス

トでフレギュアスがもう少しクシオンに近い位置にあつてもよいという推測が成立する。

時代は下るが、白銀時代の詩人スタティウス(A. D. 48-96)は叙事詩『テバイス』の中でアポロンに呼びかけて、う歌っている⁹⁵。

te viridis Python Thebanaque mater ovantem
horruit in pharetris, ultrix tibi torva Megaera
ieiunum Phlegyan subter cava saxa iacentem
aeterno premi accubitu dapibusque profanis
instimulat...

「緑のピュトンも、テバイの母ニオヘも、箴のうち
に勝ち誇るあなたにおそれをなした。容赦なきメガ
イラは、あなたのための復讐者となり、フレギュア
スを飢えさせたまま、うつろな岩の上に横たわらせ、
永劫に食卓に座らせ、不浄な饗宴へと唆した」

(Statius, *Thebais* I. 710-5)

また同じく白銀時代の叙事詩人ウアレリウス・フラック
スも『アルゴナウティカ』の中で、アルゴナウタイたちが
食卓につく様をこう歌っている⁹⁶。

iamque domos mensaeque petunt ; discumbitur altis
porticibus ; sua cuique furens festinaque coniumx
adiacet, inferni qualis sub nocte barathri
adubat attonitum Phlegyan et Thesa iuxta
Tisiphone saevaeque dapes et pocula libat
(tormenti genus) et nigris amplectitur hydriis.

「今や彼らは家を、食卓を目指し、高き柱廊に横た
わる。その傍らに、各々の妻が急ぎ慌てて寄り添う。
さながら冥界の深淵の夜の下、怯えるフレギュアス
とテセウスの側にティシフォネが添い寝し、残酷な
宴と杯を献じて——拷問の一種である——、黒い蛇
に絡みつかせるがごとくに」

(Valerius Flaccus, *Argonautica* II. 190-5)

黄金期のラテン詩とはずいぶんと趣を異にし、いささか
グロテスクな情景である。それはともかく、これらの箇所
を典拠として、「しつらえられるがありつけない宴」の刑
を、タンタロスではなくフレギュアスに関係づけることは
可能であろう。よって先の『アエネイス』第六卷六一八
〜二〇行におけるフレギュアスをめぐる一節を、六〇三行
以下の宴に関する描写へと接続させる試みが成立する。

その際に六〇二行目、現行テキストでは“quos”となつて

いる語彙について、写本のうち最古のもの（Vaticanus latinus 3867）が‘quo’¹と読んでゐる。こゝから採るならば、この関係代名詞がフレギュプスを受けるとになり、その面でのつながりも滑らかになる。

V

最後に、本小論での結論をもう一度まとめて稿を閉じることにしたい。ペイリトオスとテセウスのペアは、ホラテイウスやオウィディウスにあつても引かれるように、友情の模範的範例としての意味を持つていた。またフレギュプスが宴の罰において言及されるのは、白銀時代のスタティウスやウァレリウス・フラックスにおいて顕著であつた。これらに基づき、『アエネイス』第六巻では、601/616〜620/602〜615/621とらう順序にテキストを改変し、さらに六〇二行目の‘quos’を‘quo’²と読むことにするならば、ペイリトオス(601)とテセウス(618)との対、フレギュプス(618)と「宴」の罰(603f.)のつながり等々が密接になり、現行テキストで生ずる神話伝承上の矛盾が解消すると思われる。

改変後のテキストは次のようになる⁽¹⁾。

quid memorem Lapithas, Ixiona Pirithoumque?
saxum ingens voluunt alii, radiisque rotarum
districti pendunt : sedet aeternumque sedebit
infelix Theseus ; Phlegyasque miserinus omnis
admonet et magna testatur voce per umbras :
“ discite iustitiam moniti et non temere divos.”
quo super atra silex iam iam lapsura cadentique
imminet adsimilis ; lucent genitalibus altis
aurea fulcra toris, epulaeque ante ora paratae
regifico luxu ; Furiarum maxima iuxta
accubat et manibus prohibet contingere mensas,
exsurgitque facem attollens atque intonat ore.

sqq.

(1) 註

- 『アエネイス』第六巻の注釈書については、R. G. Austin(comm.), *P. Vergili Maronis Aeneidos Liber VI*, Oxford 1977 ; E. Norden, *Vergilius : Aeneis Buch VI*, Stuttgart/Leipzig 1927* ; H. E. Gould/J. L. Whiteley(ed.), *Vergil : Aeneid VI*, London 1996 (repr.)を用いた他、仏訳として H. Coetzee/A. Bellissent(ed., trad.), *Virgile : Eneide*, Paris 1974* また邦訳としては泉井久之助訳(筑摩書房世界古典文学全集第21巻、一九六五年)を参照した。
cf. R. A. B. Mynors(ed.), *P. Vergili Maronis Opera*, Oxford 1969.

(2)

- (3) 吳茂一『ギリシア神話』(新潮社、一九六九年)、一九八〜九頁。
 (4) cf. Austin, *op. cit.*, 601 etc.
 (5) 吳茂一前掲書、三三三頁。
 (6) cf. Hyginus, *Fabulae* (ed., P. K. Marshall), Stuttgart/Leipzig 1993 : LXXXIX, 3, 'qui (sc. Hercules) a Plutone impetravit eosque incolumes eduxit'.
 (7) cf. Diodorus Siculus, IV 63.4-5.
 (8) cf. Diodorus Siculus, IV 26.1. Reiske 註 IV, 63.5 'me'を削除する。
 (9) これらオウィディウス晩年の作品に関して、テキストは S. G. Owen (ed.), *P. Ovidi Nasonis : Tristia, Ex Ponto, Halieutica, Fragmenta*, Oxford 1915を用い、邦訳としては『オウィディウス 悲しみの歌／黒海からの手紙』(木村健治訳、京都大学学術出版会、一九九八年)を参照した。そのほか『悲しみの歌』の注解書としては、G. Luck, *P. Ovidius Naso, Tristia* Bd. II, Heidelberg 1977を参照した。
 (10) cf. W. S. Anderson (ed.), *Ovidius Metamorphoses*, Stuttgart/Leipzig 1991.
 (11) cf. D. R. Shackleton Bailey (ed.), *Horatius : Opera*, Stuttgart/Leipzig 1995.
 (12) 高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』(岩波書店、一九六〇年)。
 (13) cf. J. H. Mozley (ed./tr.), *Statius I*, Cambridge (Mass.)/London 1967 (LCL).
 (14) cf. W. W. Ehlers (ed.), *Valerius Flaccus*, Stuttgart/Leipzig 1980.
 (15) 結果的に、これは H. Goelzer/A. Bellesort (前掲②) が掲げるテキストと同一のものになる。

